

○朝顔の苗換へひし落りひともちくて今そみ
草に立つ

雜吟

加納小邦家

○培養指針通りに育て來し朝顔の今朝見る花が大
きくもなし

○はたき鳴らす妻が寄來てあたまへの花とつ
度數で基を圍むことは少年の心を警戒鼓舞してをつ

よやける鉢の朝顔

○いつまでも娘恋のふりづまにばしつつ

朝戸出で行く

○戰體制下の戀くらき臺南の街よけて歌會もど
り立落參へり

○朝顔の苗換へひし落りひともちくて今そみ
草に立つ

9月 24日 保九 △西川如見死(享
上品中田町) 平伊豆守の屋敷へ密使と
一丸) △西郷隆盛死(享
手に懸つてのうの寝地)

治(一〇)

行發日三十二月九日

刊休

新

聞

卷五八五・六

祭

東京

祭

金子まで持つて居たの狼

て取て出した小判一枚を投

腹深く短刀を突き立て

いまや四苦八苦の態であつ

だ

泣き聲杜絶れ

に

お蝶。なんだけて死んだ

れば、敵を討つ折もあた

引留めてしまつた。

「ハフ」

・愁して断戻つてみる

一筋どうすればよいのだ。

かうだが、拙者の志だ

と、愁して断戻つてみる

おまへと別れて、わしは、

老の態で、もう牛糞亂

談して、お蝶の苦提を弔へ

「いふ、苦しさうな呻吟

が聞えて、彼の歩みを

の底で、後に残つて、お蝶の苦提を弔へ

るがよい。下手人が分

き聲が聞えて、彼の歩みを

の底で、後に残つて、お蝶の苦提を弔へ

</

